

すべての教育は『洗脳』である。21世紀の脱・学校論

“本当にやりたいことは山ほどある”

だけど、僕達はやりたい事にもかかわらず
今は出来ないと何かと理由をつけてやらない。

この点において2通りの種類がおり、
1つは口先で理想を語るだけの人達。

つまり、
理想は理想であり現実には現実と別け隔て
実際に理想を現実にしようとしなない人達。

そしてもう1つの種類が、
本当にやりたいことをしたいと思うが
何かと理由があり行動に移せない人達である。

この本はこうしたやりたいことがあるのに
行動に移そうと意思決定出来ない人に対して

なぜ、
日本人はやりたい事を避ける為の口実を作り
我慢することが美德とされてきているのか？

その諸悪の根源を本書では“学校”と位置づけ
理由を論理的に掘り下げて記載をしていく。

我慢することがなぜ過去の美德であり
現代の社会においては不必要なのか？

その理由を1つずつ解説していきたいと思う。

■学校は国策『洗脳機関である』

学校機関は洗脳機関であると考える前に、
学校が作られた歴史を紐解く必要がある。

そもそも、
学校の発端となったのは19世紀、
産業革命期のイギリスである。

当時のイギリスは重火器の発明に伴い
その大量生産により工業力を増強した。

この工業力の増強に不可欠になったのが、
大量生産に必須な労働力、つまり人手だ。

『働くかわりに、労働報酬を得る』

この時に、
資本を大量に保有する雇い主である資本家と
労働をして賃金を貰う働き手という
現在の“会社”の原型となる形が作られたのである。

資本家である雇い主は大量の人手が必要であり、
当時は子供でさえ労働力として働かされていた。

“大量の働き手を集め、効率よく管理する”

幼少期から工場で教育する方法は
まさに効率よく管理するのに都合が良かった。

しかし、
ここで劣悪な労働環境における
子供の大量死という問題が起きるのである。

さすがにこれではまずいということで、
政府が主導して誕生したのが学校なのだ。

政府が学校を作った目的は、
表向きの理由と裏の理由がある。

表向きの理由は子供を保護する為であり、
裏の理由は幼少期からの教育により成長するまでに
望ましい立派な工場労働者へと育てあげることだった。

なぜ、
政府が工場の労働者を育てる必要があるかと言えば
工場の生産性が国家の軍事力に直結していたからだ。

読み書きそろばんができ指定された場所に毎日通い、
リーダーの指示に耳を傾け言われた通りの作業に励む。

そんなサイクルをこなせる“きちんとした大人”

まさに
そんな欲しい労働力を最も効率良く作り出すのに
最も手っ取り早いと標的にされたのが子供であり

その目的のもとで、
政府により作り出された『学校』である。

これが学校が生まれた起源であるのだが、
21世紀もこの体質は決して変わってはいない。

今の学校も、この原則は全く変わっておらず
工場＝会社の予行演習の様なことばかりだ。

全体行動を行い時間割の厳守は必須で、
教師＝ボスに従わなければ劣等生の烙印。

雇用者にとって管理が非常に楽な
「望ましい労働者」
としての常識を植え込まれているのである。

しかし、
この学校は工場労働者育成だけでなく
実は政府の真の目的はもう1つ存在する。

それが、
優秀な国民を育成するということ。

優秀な国民を育成するとは言っても、
自ら考え、動き自由に生きる国民ではない。

国家にとって利益を存分にもたらす
“兵士として戦う、出産すること、納税”
の3つを従順にこなす国民のことである。

この国家にとっての理想の国民の姿を、
幼少期からの“常識”として育つ人間こそが
国家にとっての優秀な国民像なわけである。

そして、
産業革命時代に作られたこの価値観は
時代も国境をも超えて現代の日本まで

雇用者にとって管理が楽な
“望ましい労働者”の規格からはみ出ないように
常識をせっせと教え込まれ続けているのである。

子供は人格的に完成していないからこそ、
道徳を教えあるべき人間像へ完成させる。

これまで記載してきた様に、
教育は直接的には工場労働者の育成機関であり
もっと大きな意味では“国民”の養成機関だった。

しかし、
人工知能やロボット・テクノロジーの発展により
人間の変わりになる労働者を作り出したことで、

この教育により“国民”を養成する必要性が
現代では徐々に解体されつつあるのである。

その影響により国を中心として考える
国民国家という幻想は解体されていき
僕達がイメージしていた様な国家は解体していく。

本書のテーマに掲げている
“21世紀の脱・学校論”
と述べているのもここに理由があるのだ。

自分の価値観にあった欲しい情報を

自己選択し自力で疑問・問題を解決する。

かつての作られたルールの上で学ぶ教育はインターネットにより完全に破壊されている。

このインターネットにより情報を国内外問わず情報を入手出来ることから

“インターネットは国境を無くした”

そう考えている人も多い。

しかし、
ネットがもたらした本当の衝撃は
国家が無くなるということなのだ。

国家が無くなるということを想像する為、
都道府県を考えてみるとわかりやすい。

2006年8月20日・21日に連続して
行われることとなった異例の決勝戦。

駒大苫小牧 対 早稲田実業

ハンカチ王子こと斉藤投手と、
現メジャー投手の田中投手の激闘が
記憶に残っている人も多いはずだろう。

2日間、連投し破れた田中投手だが
彼の出身地は北海道ではなく兵庫県だ。

しかし、
強豪校ともなれば他県の選手は当然であり
そのことに違和感を感じる人はほぼいない。

現代に生きる僕達は兵庫県も沖縄と言えど
行こうと思えば気軽に行ける地域であり、

ネット上で常に日本全国の情報を得る事で

自分の地域以外でも非常に身近に感じる。

このいつでも他県の情報に触れることができ
“接触コスト”が全く存在しないことによって

他県であっても
同じ日本という枠組みで捉えられるのである。

一方で、
僕達がアメリカは別の世界と感じる
一番の大きな理由は当然言語である。

言語を学ぶには労力（コスト）が必要であり、
これが接触コストとして“別世界”という位置づけを
僕達の頭の中に作り出していたわけである。

しかし、今やテクノロジーの進化によって
このコストが限りなく0に近づいている。

AI技術の自動翻訳により意思疎通を簡単に出来れば、
アメリカを違う国の人と感じる機会も現象するだろう。

このことこそが、
ネットがもたらした“国民国家”の破壊であり、
更に言えば国家が無くなるということなのだ。

ここまで国家の崩壊について述べてきたが、
国家自体の仕組みを否定している訳ではない。

なぜなら、僕達人間は“共通の目的”の為に
群れをなし共有する力があったからこそ
こんなにも進化しているのも事実だからである。

しかし、
時代の変化に伴い人類が生きてきたように
時流に合わせて生き方を変えなければならない。

人間の壁、国境の壁、年齢の壁・・・

あらゆる壁をインターネットで取り払った今、
僕達は国家ではない“居場所”を自らの手により
自由に作り出すことが出来る術を得たのである。

■G人材とL人材

かつての国家が国民の“中心”に位置し
学校を軸として作ってきた教育制度。

この時代の制度のなかでの幸せとは、
理想の国民像になること一択だった。

つまり、
幼少期から勉学に励み一流大学に入り
終身雇用が約束された企業へ就職する。

安定していると言われる給料を後ろ盾に
結婚し子供を作りマイホームを購入する。

これがいわゆる“幸せの形”だと
多くの人達は教え込まれてきたのである。

良い大学に入ることこそが、
幸福への唯一のプラチナチケットであり、

逆にここを逃せば
その巻き返しのチャンスは一生存在しない。

理想の国民になる事が“目的”だった頃は、
この道筋こそが優秀の烙印であったのだ。

しかし現在、
“いい大学から良い会社に入る”だけでは
幸せになれないと誰もが実感している。

なぜなら
ネットによりあらゆる情報を取得でき

自分の価値観に合わせ取捨選択出来る。

そんな自由な選択肢が与えられたいま、

“理想の国民＝労働者になる”

という目的自体が崩壊しているからだ。

つまり、

決められた道を歩めば掴めた幸せの形が揺らぎ
幸せの形に正解がなくなり多様化したのである。

では、

理想の国民になる目的がなくなった今、
一体どう“自分の幸せ”を見つけられるのか。

その点を考えるのにおいて重要なのが
僕達が今後分かれる2通りの選択肢だ。

地元、ローカルに根付く“L人間”に対して、
世界(グローバル)を行動範囲とする“G人間”

この2通りの選択に分かれる訳だが、
1つ1つその特徴を解説していこう。

まずローカル人間についてだが、
世界の9割がこちらに当てはまる。

ローカル人間の最も大きな特徴は、
かつての“理想の国民になる”目的の様に

限られた狭い行動範囲の中において、
共通の目的の中でコミュニティを形成し
守るつづけることなのである。

L人材の例としてあげられるのが
仲間との絆を守る“マイルドヤンキー”

家族や友達との付き合いを大切にし、
自分の結婚相手や子供を仲間に加える。

非常に狭いコミュニティの中で生活し
情緒的で、排他的な性質を持っている。

一方で、
1割しか存在しないのがG人材だ。

G人材は“共通の目的”を持っておらず
自分の目的を中心として動いている。

国境のないネット空間の感覚そのままに
現実世界をも縦横無尽に動き回るのだ。

人種や性別の違いを理由とした差別など
G人材にとっては無意味なものでしかない。

フットワークがとても軽く、
環境や社会の変化にも強い。

むしろそれを楽しむ余裕すらあり
眼差しは過去ではなく未来に向いている。

世界規模で動き、考え、働く彼らの中には、
世界で成功を収める“スター”の様な存在も多い。

では、
成功を収める事が出来るのがG人材であり
大きな富をL人材は得られないかと言えば

どちらも富を得ることは容易であり、
両者を分けるのは価値観であり生き方だ。

しかし、
G人材にはネットによりもたらされた
“所有からの開放”という
もう1つの最大の特徴が存在している。

インターネットの登場以前における
豊かな人生の特徴は“所有”にあった。

お金、土地、更には家、高級車など
富を表すものがどれほど手元にあるか。

それが絶対的なステータスであり、
人の幸福度を左右する要素だったのだ。

また、教授しか知らない知識のように
希少な情報の所有にも価値が存在した。

しかし、
今や一般的な情報から専門分野にまで
インターネットに情報は氾濫している。

“知らないことは検索すれば得られる”

そんな状況下では、
情報自体に“価値”は既に存在しなくなり
アクセスすれば良いものと形を変えたのだ。

上記に既に記載してきたように、
接触コストが限りなく0に近づいている。

他国の情報でさえも自国の様に扱う、
別け隔てのないフラット化する社会。

そのフラット化した社会を活かす為、
G人材はあらゆる情報にアクセスし
自ら生きるべき道を探っているのである。

グローバル化で優秀な人が出自に関係なく
価値を正しく評価される環境へと進む世界。

誰がどうあがこうとも、
グローバリゼーションは今後も進行する。

そして、時代の流れに逆らう人たちは
今後ますます厳しい立場に置かれるだろう。

逆に、
時代の風邪を逆らわなかった人たちは、

その変化の1つ1つを楽しみつつ
新しい世界で遊ぶことが出来るはずである。

では、
かつてのモノの所有による幸せは崩壊し、
幸せを掴む為のルールが失われたいま・・・

人々の幸福の指標となるものは何か？
それが、“感情のシェア”である。

あなたが自分自身の楽しいや嬉しい、
気持ちいいといった“快”の感情をシェアすると
そこにたくさんの賛同者が“いいね”をしてくれる。

そして、
その繋がりが関わった人たち全員に豊かさをもたらす。
この共感こそが、これから世界を動かす原動力なのだ。

モノやお金の価値が最小化されていく社会では、
誰にどれだけ指示され、共感されているのか？
ということが大きな意味を持つ。

逆に、
モノをどれだけ持っているか、
お金をどれだけ持っているかという価値観は
人の人生を決定づける要素にはならない。

つまり、
所有のためにやりたくないことに従事する。
そんな時代はネットの登場により終わったのだ。

これからの時代に必要なのは、
やりたいことの為にどれだけ本気になれるかだ。

なぜなら、支持や共感を得られるのは
心からやりたいことをやっている人だけだからである。

